方向

第九八号　一九八九年五月二三日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

原田憲雄

夢殿

夢殿は　秋かげろふの眞青なるに　耀よふものか　群るる雪巒
夢殿の深きしじまに　流らふる時間の翳は　つひに消えにき
木となりて　かかる佛と刻まれて　保たむものか　永遠のほほゑみ
いにしへの人も　さびしかりけむ　この御佛を　見じ　と祕しぬ
うつそみの心に沁みて　戀ほしかり　御佛の脣の　黝ずめる朱

「夢殿」は、一九三九年十一月十九日、大和斑鳩の夢殿に参詣したときの感想を、連作短歌の形式にまとめた作品です。はじめは十首だったのを、削って五首にしました。理由はのちの説明でおわかりいただけましょう。半世紀も前のものですから、自分の作品ではあっても、当時の心境を正確に伝えることはできませんが、追想すると、ほぼ次のようなことになりましょうか。

夢殿はたいへん有名で、拝観者も多いようですが、そのようになったのは二、三十年前からのことで、戦前は、夢殿はもとより、奈良の寺々は、大仏さまの東大寺をのぞくと、どこもひっそりとして、参詣者の姿もあまり見

られませんでした。わたしのたずねた日もそうだったのでしょう。とにかく、京都から斑鳩への電車のことも、電車を降りてからの道筋も、さきに訪うたはずの法隆寺のことも、記憶から抜け落ちてしまっています。

生れて初めて踏み入った境内の晩秋の空を背景に、端正な八角形の夢殿が、まさに夢のように、立っていました。わたしは見つめて動けなくなりました。ほかにひとりの人もいません。音ひとつありません。目のくらむような感じがしきりにするのですが、じつは、まっさおな陽炎がゆれているのでした。そうしてその陽炎にたわむれるように、白い小さな羽虫の群れがきらきら光りながら飛び、もつれたかと思うとひろがり、ひろがったかと思うとひとすじに集まり、地にちかく落ち、空たかく舞いあがって耀やくのでした。この虫の名は、そのときには知りませんでしたが、あとで、半翅目ワタアブラムシ科の昆虫であることがわかりました。からだに白い蝋に似た物質を分泌して晩秋に飛び、この虫が飛びはじめると雪の降る日がちかいのだという伝えがあるので、「雪虫」というのです。俗称ですが美しい名ではありませんか。

① 夢殿は秋かげろふの眞青なるに耀よふものか群るる雪蟲

はこのような状況をうたったもので、口語訳すると「夢殿は、秋の陽炎がまっさおだった。なんと光り耀いて飛ぶことだろう、雪虫の群れは」というほどの意になりましょうか。「かげろふ」はカゲロー、「さを」はサオ、「かがよふ」はカガヨーにちかく発音しています。

さて、石の階段をのぼり、夢殿のお堂にはいりますと、流れる光のなかに救世観音が、なかば眼をとじて、立っていらっしゃいます。

流らふる光のなかに　湛として　眼をとづろ　御佛の像

「流らふる」は「流る」の音が延びたかたちでナガロールに近い発音です。「湛」という漢字は、内面の力が充実し、沸き上がって、やがて溢れ出ようとする前の、静けさをいうのです。耀く雪虫に幻暈をおぼえながら堂内にはいって仰いだ仏さまからうけた感じをこのように歌うのは、間違ってはいないと思いますが、説明に落ちた気もせぬではありません。

夢殿に　うつしみ化して　芬陀利華　ふかきしじまに御佛は観む

悩みに満ちた世界を救おうとして立ちつくしておられる観世音菩薩のまえに、ひざまづき、ぬかづいているうちに、わたしの「うつしみ」現実の身は、「芬陀利華」白い蓮の花に、変化してしまいそうです。深い「しじま」静寂のなかで、蓮の花となっていつまでも、み仏を仰ぎつづけたい。右の一首の大意です。この願いもいつわりではありませんが、「芬陀利華」は、ここでは言葉としてうわつき、「観む」とくちにはいいながら、み仏が見えていないのです。

われのみがうつしみゆゑに　嘆くがに　寂しくて仰ぐ　御佛の像

いま立つ夢殿という、現在の、此処は、み仏の世界ですが、ここではわたしだけが生きた人間であって、他のすべては人間ではありません。そのことが反省され、「嘆くがに」なげかんばかりとなり、さびしくて、み仏の像を仰ぐ、というのです。だが、この歌では、おのれのさびしさのほうに心が片寄っていて、「仰ぐ」と言いながら、見ているのは「仏」ではなく、「像」にすぎないのです。だから、

御仏の　おもてにうかぶさびしさや　妖しき笑みとなりて　ただよふ

というふうに、観音さまのお顔の微笑さえ、「妖しき笑み」といった、おかしな受け取りかたしかできていないのです。

「夢殿という現在の此処」ときに申しましたが、「現在」は時間、「此処」は空間です。ところで「時間」とか「空間」といっても、そんな「もの」が実在するのではなく、人間が世界を考えるために仮に設けた座標軸にすぎません。考えるには便利ですが、座標軸の二方向に分解された世界は、もはや生きた世界ではなく、抽象された無機的な世界です。その世界におかれた「おのれ」もまた、生きて働いているわたしではなく、抽象された「自我」なのです。

わたしたちはなにげなく「わたしは…」といい、その「わたし」が、なにものにも代えがたい生きて働く自分だと思っていますが、すなおに振り返ってみると、「わたし」も、無機的な「時間」に投影された流転する自我、無機的な「空間」に投影された変化する自我、にすぎないことがわかります。その自我がわたしの意識に反射する時、わたしはそれを「時間の翳」「空間の翳」として受け取っているのです。だから「時間の翳」「空間の翳」といっても、じつは自我であることがわかります。夢殿をおとずれながら、み仏そのものをみることもできずにお像の表面をまさぐっている「わたし」は「翳」にすぎないのでした。だが、み仏を前にして深い静寂にひたされていると、流転変化しながら「時間・空間の翳」にすぎない自我も、いつしか消滅しているのです。

② 夢殿の深きしじまに流らふる時間の翳はつひに消えにき

は、その消息をうたおうとしたものです。この一首があれば「芬陀利華」も「われのみ」も「妖しき笑み」もいらなくなりました。自我がなくなり、時間も空間も意識から消滅した深い沈黙こそ、夢殿というみ仏の世界なのでしょう。

そのような幸福なとき、意識から時間も空間も消えた沈黙に満たされたときは、たちまちやぶれてしまいます。

吐く息の　大きといきを　怪しみぬ　われの心は嘆きけむかも

大きなといきとともに、消滅していた自我がめざめ、きえていた時間・空間も流れはじめます。まるでじぶんたちこそ真実であるかのように。嘆きがそのようなことを引き起こすのか、そのことが嘆きとなるのでしょうか。虚仮としかいいようのない思いにわずらっているより、

③木となりてかかる佛と刻まれて保たむものか永遠のほほえみ

人間は、意識をもつ存在として、自信に満ちた顔をしているが、反面、つねに嘆き苦しみ、嘆きの姿、苦しみの表情を、ひとのまえにさらし続けねばならない。この救世観音のような永遠の微笑を保持することができるのなら、われわれには生命のないものとしか思えない木片になっても、仏像に刻まれるほうが、よいのではないか。「ほほゑみ」はホホエミと発音していただきたく、ホオエミとされないよう願います。

いにしえの人は、この仏を秘仏として、布でくるみ、お堂をとざして、ひとびとの目から久しく遮断しました。いにしえの人もまた、いまのわたしと同じような気持になり、それもさびしくて、このみ仏を見るまい、ひとにも見せまい、としたのでしょうか。

④　いにしへの人もさびしかりけむこの御佛を見じと祕しぬ

「いにしへ」はイニシエ、「さびしかりけむ」はサビシカリケンにちかく発音します。「さびしかりけむ」は、はじめ「さびしくありにけむ」としていたのですが、たるんだ調子がそぐわないと感ぜられたので、短歌としては字たらずになりますが、いまの形に改めたのです。

⑤　うつそみの心に沁みて戀ほしかり御佛の脣の黝ずめる朱

み仏のゆたかな国、沈黙のとき、その真実から、「現実」と名づける虚仮の時間・空間に帰ってくると、身に染み、心に沁みて、み仏のくちびるの、塗料もはげてあおぐろくなった朱のいろが、こいしかった。感覚をとおしてしか感じ、考ええない者には、み仏を慕うにも、色や形にたよるほかないのが、「現実」というもののかなしさでしょうか。「沁」は、あやまって「泌」と書かれることがあります。「こほしかり」はコホシカリと発音します。「脣」は唇の古形、「黝」は青みを帯びた黒です。見馴れない漢字が多いのは、このうたを作った時代の作者の言葉についての好みによるのですが、夢殿の救世観音にはふさわしい字面であろうとも思います。

この歌は、わたしの二十歳のときの作品で、おさなく、いたらぬもの、人の目にふれないところへ蔵まっておくべきだったようです。　（一九八九・五・一三）

※「夢殿」は二十三、四年前に作曲された。ある事情から、わたしは聞くにおよばず、曲そのものも廃止されたと思っていた。ところが一部のひとたちの間では保存演奏されていたらしい。ちかくまた公演するとのことで、関係者のひとりが、歌詞の趣意や製作の動機を質問された。右の文章はそれに答えたものである。（一九八九・五・一五）

西賀茂

一九八九・五・五　　原田　慶

終着西賀茂車庫前でバスを降りた。そのままに、まっすぐ歩くと賀茂川べりに出るらしい風景である。バスを降りた人は、来た方向へ引き返すように歩くか、そこに置いてあった自転車に乗るかして、どこへ行ったのかいなくなってしまった。こどもの日の午後だったので、バスには動物園に行ってきたらしい小学生がたくさん乗っていた。こどもたちは疲れたように黙り込んだり居眠りしたりしていたが、引率の若いお母さんたちは元気におしゃべりをしていた。

突然、町はずれに取り残されて、わたしはかばんから地図を出し「安来神社」という所を確認した。バス停から北西にあたる。山手の方を見上げると、六角か八角か妙に大きな建物が目だっていた。とにかくそちらへ向かって歩いて行くと、建物は寺だった。町中から移転してきたのだろう。庭も広いらしく、北山杉などが塀のうえに頭を出している。そこに立って、さらに高い方を見上げていると、新しい家の建ち並んだなかに、一部こんもりと小さな森があり、その端に枯れた大木が枝を切り取られて、裸の姿で立っている。ふつうの家の庭ならあんなに大きな枯木を白々とそびえさせておくことはないだろう。あれかも知れない、「村の鎮守の神様の、今日はめでたいお祭り日」という雰囲気だと思って、わたしは勇んで歩いて行った。

神社は山の斜面というような位置にあり、小さなが祠が二つあって、戸が閉まっている。桧皮葺きの祠をもうひとつ板屋根が包んでいて柵でかこんで大切にしてある。そこからすこし下りたところに、床几を二台ならべて

屋根をつけたほどの拝殿のようなものがあり、さらに下がると木の鳥居が立っている。これも上の横木は銅で巻いて傷むのを防いであり、その傍らのたかい石柱に、「村社　大神宮」と大きな字で彫ってあった。楠や椎、杉などの木が茂って、村の社らしい素朴さがある。

昔は、畑のなかの宮の森で、落葉に埋もれてほこほこと暖かく、のどかな神社だったのであろう。今ではすぐ肩の上が自動車道路になり、横の斜面にも家が階段状に建っている。その家々と神社のあいだの坂道はかなり急で狭いので、自動車を上の道路に止めて、板の台に小さなコロをつけたものにテレビを乗せ、坂の途中の家へ運んでいる人があった。それでも早くすべりすぎるので困難しながら、ちょうど鳥居の前あたりの家へ持ち込んでいった。こんなふうに周りが明るくむきだしにされた神社は、すうすうと風が吹き抜けて、すこし座り心地が悪そうだが、それなりに辺りを圧してあるじ顔をしているのはさすがである。ひだり肩に、道路に向けて「川上大神宮」と書いた新しい立札がたっていた。これも「やすらい踊」が無形文化財に指定されているので、ことさらに立てられた札のようである。しかし地図に標記されているような「安来神社」という文字はどこにも見当たらなかった。

鳥居を出て坂を下った所に、他の家とはすこし違った構えの家があった。玄関に並んで三部屋ほど続く細長い造りで、部屋の前はずっと長い縁側になっている。だれでも腰を掛けて休めるようなふうに道に沿った縁にはカーペットが敷いてある。そこにミシンが一台、中途半端な角度で置かれているのが、この建物をなんとも野放図でやりっぱなしという感じにしているが、よく見ればほかには何も乱雑さはないのであった。台所が別に神社の

山裾にあって、戸があいているので、鍋などがずらっと並んでいるのが見える。神社に関係ありそうだと思ったが留守だった。まわりの道を歩いてみたが、新しい家ばかりで、土地の人らしい家が見つからない。休日なので子どもとキャッチボールをしている若い父親もいるが、神社のことなど知っていそうには思えない。家のあいだに畑も残っていて、黒いビニールをかけた畝に玉ねぎが茎を伸ばしている。さやえんどうの食べ頃なのがたくさんできているが、摘んでいる人はない。イチゴやレタスができているところもある。もとはこのような畑が広がっていたところに住宅が侵入してきたのだろう。

神社の後ろにきて自動車道路の上の斜面で、ひろい畑のかぼちゃに支柱をしている人があった。この人にたずねてみようと道を上がって行くと、小型トラックを運転した女のひとが来て倉庫の前でとまったので、そのひとにたずねてみたが、自分は大将軍神社の氏子だから「やすらい」のことは知らない、神社のおばさんにたずねるといい、と教えられた。さっきの細長い家である。念のために、かぼちゃの畑の人にもたずねてみた。

「やすらい祭の神社やさかい、やすき神社というのがええのとちがいますか。わしらは大将軍神社の氏子やさかい、川上のことはくわしいは知りませんけど、やすらい踊りはずっと見てます。上野とおんなじ赤い着物で、おんなじように踊りますな。ちょっと前までそこの畑に川上の氏子総代さんが仕事してはったにゃけど、もうどこや行かはったな」

今宮神社との関係を聞いてみた。

「そうです。いまでもやすらい踊りは今宮さんへお参りに行ってます。今宮さんへ参って踊るんですわ。昔は

鉦やら叩きもってずっと歩いていっとったけど、このごろは自動車でいとるな」

と言って仕方なさそうに笑った。そしてさらに、

「川上神社の氏子でも、祭のことをよう知ってるのは古い人だけで、若いもんは知らん顔や、関係なしやな」と言う。この人も川上の人ではないので、やすらい踊りの歌は知らなかった。やはり神社のおばさんなら知っているだろうということだったので、わたしはまた坂道を下りて行った。

長い縁側には陽があたって明るく、何となくのんびりとしていて、おばあさんはまだ帰っていなかった。道をはさんだ向いの家から若い主婦らしいひとが、ごみを捨てに出てきたのでたずねてみたが、「やすらい」はここで踊ってから町内の家をまわって行ったけれど、自分たちもここに来て日が浅いのでわからない、小鬼はいなかったような気がする、と話してくれた。

「おばさんがいはったら知ってはるんやろけど、どこ行かはったんやろ」

と首を傾げてくれたがわがるはずがない。

「おおきにお忙しいとこお手取ってすみませんでした。またいつかたずねてみますわね、おおきにさいなら」

誰でも忙しいのに、わたしは邪魔をして謝りながら歩いている。思い出してみると、今宮神社で二組の鬼が踊ったが、一組のほうは小鬼がいなかった。あれは川上の「やすらい」だったのかもしれない。同じ衣裳で念仏踊りをする「やすらい祭」があちこちにとび離れて残っており、そのすぐ隣のひとはまた別の「祭」を持っている。昔から「祭」を守ってきた人々があり、その人たちによって行われる「祭」からは、後からやってきた人は疎外

されてしまう。ずっと昔から守り続けてきた人にはその「祭」は生命の根源にかかわるものだろうから、突然よそから来ていっしょに祭り行事に参加しても、ほんとうの意味で「祭」の仲間入りをすることは無理なのだとおもう。

わたしは子どものころに群馬県にいて、正月に「おまゆ玉」というものを神棚にかざったことをおぼえている。それは養蚕や豊作を祈るために作るものらしいが、十五日の「どんどん」の火でおまゆ玉を焼いて食べる。それで厄払いができるということだったのかもしれない。

わたしは「どんどん」に行って、焼いたものを妹か誰かとみんな食べてしまい、家に持って帰らなかったので、母に叱られたことがあった。その土地の「祭」を見習ってみても、誰もいけないとは言わないが、どうしろと教えてもくれない。

川上神社のすぐ近くで仕事をしていた人は、大将軍神社の祭をすると言ったので、まっすぐ南の方向にあるらしいその神社へ行くことにした。途中、神光院(じんこう)によった。ここは大田垣蓮月が晩年をその茶室にすごしたと聞く寺である。二一七年上賀茂神社の神主、賀茂能久(よしひさ)という人が、「霊光の照らした地に一宇を建立せよ」という神託をうけて創建したという。「放光山・神光院」といい、境内には弘法さん、不動さん、弁天さん、きゅうり塚などとにぎやかな真言宗の寺である。西側の小門を出たら、送り火の船形の山が近くに見えた。

南へ下がって大将軍神社は、朱(あか)い柵にかこまれた小さな丘になっている。境内は川上社の二倍くらいだろうか。こちらは四町内の氏子が交代で祭を勤めるそうである。旧今原村、鎮守庵村、総門村、田尻村の産土神であると

されている。祭神は磐長姫命で、方除けと安産の神。末社には、お祓いの神、水の神、商売繁盛の神、疫病の神、火の神、醸造の神、厄除の神、藤原氏の氏神、山の神とそろっておられる。推古天皇のころからこの地に瓦の窯があり、そこに働く人々のための「瓦屋守の鎮守」として建立され、桓武天皇が平安京に遷都されたときから京都の四隅に大将軍が祀られて京都の守護神となったということである。

雲林院の玄武神社も都の北を守っているが、さらに北にこの大将軍があって、京都は何重にも守護されているのである。

大将軍神社からこんどは西の山際へ向かって歩くと西方寺がある。「来仰山・西方寺」　浄土宗であるが、もとは平安初期に円仁（慈覚大師）によって創建された天台宗の寺であった。毎年八月十六日に五山の送り火の一つ船形万燈籠が点火され、そのあと、この寺の境内で六斎念仏が行われるという。寺のまえを通って道を進んでゆくと、そのまま山のふところ深く、阿弥陀浄土が出現したのではないかと思うほど、見える限り、山ひだの陰まで墓また墓である。何々墓地などといわれる整然としたものではなく、地の中から湧き出てきたかといわんばかり、一面の墓である。入り口から左へ登るのが西方寺の墓地らしくて、それより奥は、京都市の墓地なのだろうか。左へ登るほうに蓮月尼の墓がある。知らずにどんどん登って行ったら道がなくなって、墓を越えたり踏んだりしなければ進めそうにない。見わたすかぎり墓だがそれらしいものもないので引き返した。途中から山のほうへ石段を十四、五段あがったところの、ふたかかえもありそうな桜の大木の下に、すこし傾いて蓮月の墓があった。腕で大きく輪をつくったほどのどっしりした楕円形の自然石に、あとでつけたらしい御影石の香爐と花立て

が置かれ、神光院と西方寺からの水塔婆が二枚あがっている。新しいしきみも供えてあった。線香を用意していなかったので、その辺りにたくさん咲いていたウマノアシガタを折って供え、おがんだ。この草は毒草だからいやがる人もあるかもしれない。妙徳寺のおしょうさんは、仏さまにとっては毒のものなどないはずだ、という。わたしもそんな気がする。

西賀茂は新しい住宅がふえて、変りつつあるが、まだ村の風景をいくらかとどめた、土の香の残るしずかなところであった。ここに「やすらい祭」はよく似合う。どうか洗練された芸能としてのパフォーマンスになってしまわないように、根のない箱入りの「文化財」になってしまわないように。

暮れてきた道で、運よくタクシーを拾った。しかしそのなんと近かったことか、十分ほどで家に着いた。襖の向うにいたようなものだった。京都という土地はほんとうに不思議なところである。

上賀茂

一九八九・五・一五　原田麟

五月十五日の上賀茂は祭一色という感じである。上賀茂の「やすらい踊」を見てから、葵祭を上賀茂神社で見ようと思って出かけた。

わたしの「やすらい」をたずねるのは四つめで、これで最後になる。前もって大田神社に電話したら、「やすらい」は町内の祭なので、はっきりとはわからないが、例年は十一時半ごろにうちへお参りに来てくれはります、という返事だった。くわしくは、ひがしらさんの所へたずねてくれと言って、電話番号まで教えてもらった。ひ

がしらさんが齋殿（こうどの）つまり指揮者なのである。そちらへたずねたら、十二時ごろに上賀茂神社のあたりにいます、ということである。「あたりにいます」というのがどういうことか分からなかったが、とにかく十時すぎに家を出た。

上賀茂神社は「葵祭」を迎える準備で、たくさんの人が働いている。広場では露店の人がテントを張り、ガス台などを取りつけて、支度をしていた。さすがに店の数が多い。下鴨よりも多いようである。十二日の「御蔭祭」は雨だったが、十四日の「今宮神社の還幸祭」と、きょう十五日は、さわやかな天気になった。神殿のほうへ行ってみると、橋殿をふき掃除している人や、庭のはき掃除している人などがある。本殿にはいったら、石段の下に美しい白馬が立っていた。礼拝所の天井に、かつらあおいの大きな枝がかざしてあって、葉がしおれないように、切り口にアルミ箔のようなものが巻いてあり、濃い緑が生きいきとしてあざやかだ。参拝してから「やすらい踊」をさがしにいった。

明神川に沿った社家町のあたりで、小さい子どもたちが引く神輿に出あった。「やすらい祭」と染め抜いた紺色のハッピを着て、大人に先導されながら、車をつけた神輿の長い綱を引いている。上賀茂神社のほうへ向かって歩きながら声をそろえて「ワッショイ、ワッショイ」といっているが、かついでいるわけではなかった。他にも空色のハッピを着た子どもたちの引く神輿に出あった。町角にテントを張って休憩所のようなところを造り、女のひとたちが何かしている。町中が祭である。もうすこしで大田神社というあたりで、赤い着物のやすらい鬼が鉦と太鼓をならし、おはやしが笛を吹いて歩いてくるのに出あった。大田神社の参拝はすんだのである。これ

から上賀茂神社へ行くらしい。わたしも一緒にあともどりしてついて行った。先頭に大きな花傘があり、次に、きれいに化粧してもらって赤い着物にうす緑の袴をはいた小鬼が二人、白い着物と袴で、烏帽子をかぶった介添え役に、手を引かれて歩いている。笛や太鼓の音につられて、歩くのが速くなるので、五歳くらいの小鬼は、ひっぱられるようにして歩いている。「もっとゆっくり、ゆっくり歩け」と、うしろのほうの人が言っている。大鬼は足半（あしなか）ぞうりをはいていて、足のかかとがはみ出している。鉦の網には白い布がぐるぐる巻いてあって、ちょっと鉦を持ちかえて手首を振っている。左手に鉦を持っているが、重くて手がしびれるらしい。この鉦は祇園祭のコンチキチンと同じだが、叩きかたは、もうすこしリズムが単純でチンチンチンと、円形の平たい椀状の中に、バチを上下させてふちに当てて鳴らすのである。鬼の衣裳は、上野の「やすらい」より一か月以上も季節が進んでいるせいもあって、白い着物も赤の大袖も薄物で、たけも短く軽そうにみえる。赤い大袖の背に「花」と縫い取りがしてあった。しゃぐまの髪をばっさりとかぶって、顔が見えない。大鬼だけは素足である。うしろにも花傘がある。

上賀茂神社の一の鳥居の前でひと踊りした。うたい手は大人が一人で、濃紺の着物と袴に烏帽子をかぶり、首に赤い布をかけて、刀をかつぎ、扇をすこし開いて顔の前にかざしてうたう。この人も素足にぞうりである。

やすらいや　花や
今年の花は　よう咲いた花や

すると葵の紋のついた着物をきた子どもたちが五人ほどで、

エンヤー　やすらいやあ　花やあ

と囃す。笛の子どもたちは雷紋の着物であつた。笛、鉦、太鼓などに合わせて小鬼も踊る。向かい合って進み、おじぎをして、羯鼓を打ち、入れ代ってもどる。三回くりかえすが、出あっておじぎをするのが可愛らしい。

踊り終わって本殿まで歩き、お祓いを受けて、そこでまた踊った。子どもたちが、大人の言うとおり神妙にしないので叱られている。「こら、ちゃんと並べ」「じょうだんばっかりすんな」　あまりふざけていた子が扇子でポンとたたかれて、びっくりしている。黒い紋付に、袴をはいた大人が五人ほどついていた。

神社を出ると、町の家を一軒ずつ踊りながら回って行くのである。大鬼も小鬼も、どこの家にも同じように熱心に踊っている。小鬼はよく辛抱している。大人に引き廻されて、ほんとうはつらいのだろうと思うが、いちばん真面目な顔をしている。すこし大きい子どもたちもふざけてはいるがよくやっている。これだけ辛抱して子どもが祭に参加するには、その大切さを常から感じとらせる環境が必要だろう。上賀茂という土地には、神を祀るという雰囲気があるのかもしれない。やすらいが町へ出て行ってから、わたしは大田神社へかきつばたを見に行った。祭に参加していない子どもたちも、学校が半日だったのか、給食のパンをポリ袋に入れて帰ってくるのに出あう。

大田神社のかきつばたの沢に着くと、「育成保存のために御協力下さい」という箱があるので、すこしお金を入れて、写真を一枚撮った。すると、わたしの横にいた男の人が、連れの人に、写真を撮るのなら早朝に来なければだめだ、こんな昼にしおれかけてからでは美しいのは撮れない。それに一番の花が咲いた時ならムラがない

が、もういくつも咲いてからだと花のないところもある。せめて、やすらい鬼の着物といっしょに撮ればコントラストが美しいのだが、というようなことを言って、わたしのほうを見て「写真もそのくらいの工夫がいるんです」という。わたしはあいまいにうなづいてちょっと笑った。その人は続いて、連れの人に話している。

「わたしらのこどもの頃は、こっちから中の島まで樫の木が橋みたいに伸びとって、それをつとうて島へ渡って遊んだもんです。そんな時、みんなが渡るのを、今の神主さんの先代さんが、家の中からじっと見てて、渡ってしもた頃に出てきて、こらおまえらこっちへ来いて言わはるんですわ、ほな、しょうおへんやろ、その木を渡るよりほかにないんやし、渡ってこっちへ来ると、そこへ並べいうて、みんなお尻パンパンどつかれるんです。もうしたらあかんぞ、いうてね。なんべんたたかれたか分からしまへん。そんな頃から見てるんでっさかい、かきつばたなんて、毎年、ああまた咲いとるな、今年はよう咲いとるなてなもんですわ。そやけどこれも世話が大変です、金もかかります。ああやって箱が置いてますけど、開けたかて一円玉がちょっと入っとるくらいのもんです。ごみはようけほかして行くけど金は入れまへんな。花の頃になると、写真を撮ろとおもう人やらが、いま花はどんなもんや、もう咲いとるか、て神社の電話は鳴りっぱなしですわ、うるさいさかいて出んとほっといたら応対が悪いて文句が出ますしな」

連れの初老の人は、話している人の客らしい様子だったが、ほとんど聞き役で、時々、ほうなど言いながら笑っていた。なるほど、花は美しい時期をすこし過ぎている。それでも後から来た女性グループのひとは「いまどき、こんなに美しいかきつばたを、ただで見せるなんて粋やんかなあ、どこへ行ったかて先に入り口で拝観料を取ら

れるのに。これだけのかきつばたを毎年咲かそと思もたら大変え」と感心して見ていた。

この大田神社は、上賀茂神社の摂社で、天鈿女命と猿田彦命を祀っている。

わたしはそれから再た上賀茂神社の方へひき返したが、途中、こどもの引く神輿が、帰って行くのに出あった。やすらい踊はまだ町に鉦と太鼓の音を響かせて、遠くで赤い着物がひらひらしているのが見えた。あとしばらくすると葵祭の行列が上賀茂に到着する。

これでわたしの「やすらい祭」を追う小さな旅は終わった。「やすらい祭」とは、というような結論はなにもないけれど、今宮神社で出あったおじいさんが、「やすらい祭は今宮さんのもんではおへんで」と言ったことは、ここに住む人の実感だと思った。上賀茂のやすらいの人にもたずねてみたが、町の祭だから、今宮さんとは関係ないということだった。やすらい堂という所から出て町を廻って帰るのである。玄武神社では、これはもともと自分のところの祭を上野に依託したものだと言っていた。

つまり、賀茂から北山あだり一帯にあった念仏踊が、支配する人の考えや、災害、戦争などで、形を変えたり、中断したりしながら、根強く残った、と言えばよいだろうか。

あのおじいさんとおばあさんは、わたしを「やすらい祭」へ誘うために現れてくれた、惟喬親王と紀静子の霊だったかな、などとおもしろがっているが、さてあの二人がどんな人だったか、どうしてもはっきり見えてこない。二人に出あったことだけは確かである。

七　六五　―法華経巡礼３０―

1989.5.18.　原田憲雄

2-17. かつて如来たちが存在し、幾千多数の仏たちが涅槃した。
無数カルパの過去の世のかれらの数は知りえない。（７１）
一切のそれら最高の人たちは、あまた清浄の法を説き明かした、
譬喩により、あるいは原因や動機など、幾百の巧みな方便により。（７２）
かれらはすべて一乗を説いたので、一乗のうちに歩みいらせ、
一乗のうちで成熟させる、数えきれぬ幾千万億の衆生たちを。（７３）
他の方便がいろいろジナにはあるけれど、わたしの無上道をこそ説き明かす、
如来は、諸天も同居のこの世界での信解や意欲を知ったうえで。（７４）
そこにはしたしく法を聞き、また聞き終わった大衆がいて、
布施はなされ、戒は保たれ、すべての修行が耐え忍び成就せられた。（７５）
精進、禅定をもって供養とし、智慧によって諸法が思索され、
徳行種々になされたので、かれらは覚りを得るものとなったのだ。（７６）
涅槃にはいったジナたちの教誡に従うものがだれかいて、
耐え忍びつつ訓練、教化されたなら、かれらは覚りを得るものとなる。（７７）
またあるものは、涅槃にはいったジナたちの遺骨に供養し、
宝玉造りの幾千という多くの塔、金、銀、玻璃、（７８）

さてエメラルド、猫眼石、真珠でできた、あるいはまた、
最上の琉璃、インドラ青玉の塔を建て、かれらはすべて覚りをえた。（７９）
またあるものは石造の塔、さてはチャンダナ、また沈香、
デーヴァダールやさまざまの寄せ木ざいくの塔を作る。（８０）
煉瓦つみ、粘土をつくね、喜びいさんでジナの塔をつくるもの、
そのため土砂の堆積を、森林や険崖にきずかせるもの、（８１）
砂の山をあちらこちらにつくっては、ジナの塔になぞらえて、
遊びたわむれる少年たち、かれらはすべて覚りをえた。（８２）

ye cāpy abhūvan purimās tathāgatāḥ parinirvṛtā buddha-sahasr aneke /
atītaṃ adhvānaṃ asaṃkhyakalpe teṣāṃ pramāṇaṃ na kadāci vidyate ||71||
sarvehi tehi puruṣottamehi prakāśitā dharma bahū viśuddāḥ /
dṛṣṭāntakaiḥ kāraṇa-hetubhiś ca upāyakauśalya-śatair anekaiḥ ||72||
sarve ca te darśayi ekayānaṃ ekaṃ ca yānaṃ avatārayanti /
ekasmi yāne paripācayanti acintiyā prāṇi-sahasra-koṭyaḥ ||73||
anye upāyā vividhā jinānāṃ yehī prakāśenti mamāgradharmaṃ /
jñātvādhimuktiṃ tatha āśayaṃ ca tathāgato loki sadevakasmin ||74||

ye cāpi sattvās tahi teṣa saṃmukhaṃ śṛṇvanti dharmaṃ atha vā śrutāvinaḥ /
dānaṃ ca dattaṃ caritaṃ ca śīlaṃ kṣāntyā ca saṃpādita sarva-caryāḥ //75//
vīrye ca dhyāne ca kṛtādhikārāḥ prajñāya vā cintita eti dharmāḥ /
vividhāni puṇyāni kṛtāni yehi te sarvi bodhīya abhūṣi lābhinaḥ //76//
parinirvṛtānāṃ ca jināna teṣāṃ ye śāsane kecid abhūṣi sattvāḥ/
kṣāntā ca dāntā ca vinīta tatra te sarvi bodhīya abhūṣi lābhinaḥ //77//
ye cāpi dhātūna karonti pūjāṃ jināna teṣāṃ parinirvṛtānāṃ /
ratnā-mayān stūpa-sahasr anekān suvarṇa-rūpyasya ca sphāṭikasya //78//
ye cāśmagarbhasya karonti stūpān karketana-mukta-mayāṃś ca kecit /
vaiḍūrya-śreṣṭhasya tathaindranīle te sarvi bodhīya abhūṣi lābhinaḥ //79//
ye cāpi śaileṣu karonti stūpān ye candanānāṃ agurusya kecit /
ye deva-dārusya karonti stūpān ye dāru-saṃghāta-mayāṃś ca kecit //80//
iṣṭā-mayān mṛttikasaṃcitān vā prītāś ca kurvanti jināna stūpān /
uddiśya ye pāṃsuka-rāśayo 'pi aṭavīṣu durgeṣu ca kārayanti //81//
sikata-mayan va puna kuta ye kecid uddisya jinana stupan/
kumarakaḥ kridisu tatra tatra te sarvi bodhiya abhusi labhinaḥ //82//

仏のただ一つの教え、ただ一つの乗り物、一乗、「大乗」とよばれるその教えをうけて、われわれ衆生がなすべき修行は、これはまた一つと限られることはなく、じつに多種多様である。それがこれから列挙される。二百五十戒・五百戒を守るといった声聞の修行、布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧の六波羅蜜のような菩薩の修行はもとより、仏の舎利を供養する塔を建てることが勧められる。宝玉製の塔などは、誰にでもできるものではないが、木の塔でもよく、砂の塔でもさしつかえない。力に応じたものを、心をこめて供養すればよいのである。

さてこの塔をつくる材料として、最初にさまざまの貴金属・宝玉の名が現れる。（78）（79）の金・銀・玻璃・エメラルド・猫眼石・真珠・琉璃・インドラ青玉は梵文をそのまま訳したのだが、正本では黄金・白銀・水精・琉璃・馬脳・車渠・異宝・明月珠とし、妙本は金・銀・玻璃・車渠・馬脳・玫瑰・琉璃珠とし、合わない『法華経』には宝玉の名は頻出し、ことに妙本「授記」「見宝塔」両品には、金・銀・琉璃・車渠・馬脳・真珠・玫瑰が「七宝」sapta-ratna として宝の代表のように扱われている。しかし「方便品」に列挙する宝玉とは一致せず、同じく「七宝」といっても、他の経典では違ったものを指す。違いそのものも問題だが、七宝の「七」が七つを指すのか、「多数」の代詞ではないのかといいった疑問もあり、「七宝」に含まれる品目の相違が何によって生じたのかといった問題もある。それらをすこし調べてみた。『法華経』を読むのが主眼だから「方便品」にいま出てきた一つ一つから検討してゆく。

「金」漢音キン、呉音コン。ここの梵語は suvarṇa だが、hiraṇya, jāta-rūpa も金をあらわし、それぞれ「よい色」「魅惑する物」「生来美しい」の意。hiraṇya は『法華経』では「財産・財宝」の意に使われることが多

いいが、そのまま、あるいはsuvarṇa と結んで「金」の意に用いられる。jātarūpaは『法華経』では使われていないようだが一般に「真金・紫金」と訳されることが多く、正本の「黄金」は真金に近いのではないか。金は、七〇〇〇年以前にすでにエジプトで使用され、銅器に先んじるという。

「銀」漢音ギン、呉音ゴン。大体はrūpya（よい色の物）が使われるが、「序品」ではrajata（白銀に輝く物）が使われる。正本の「白銀」は、これにふさわしい。

「玻璃」ハリ。音写の漢字はさまざまだが、以下ともに列挙しない。「方便」「授記」両品ではsphaṭikā(裂けた物・水晶・ガラス・碧緑・玻璃）が使われ、他の品ではśilā(石・碧玉・玻璃）。近代訳では水晶とすることが多いが、sphaṭikāはガラスを言うギリシャ語から転化したらしく、『法華経』の玻璃にガラスを含まぬとは言いきれず、といって『法華経』そのものが水晶とガラスの差異を意識したかどうかは不明であり、「授記品」では梵文に相当する漢訳語もないといった状態だ。「玻璃」と踏襲しておく方が穏やかだろう。

「エメラルド」aśmagarbha（石胎・エメラルド・馬脳・琥珀・赤色宝）。これが分かりにくいものの一つである。梵文の順序に正、妙本の訳語を機械的に当てはめると、正本は「琉璃」、妙本は「車渠」になる。しかし両本ともに「琉璃」も「車渠」もあとで別に出るから、これらがaśmagarbhaの訳語であるはずがない。エメラルドと馬脳と琥珀は違った物だのに、それを一つの言葉の訳語に当てていることに、訳者たちの困惑がうかがえる。馬脳と訳したのはaśma(石)をaśva(馬)と誤ったことによる、という説があり、aśmagarbhaは今いう「めのう」とは同じでない、という説もある。われわれのいう「めのう」は石英の一種である玉髄で、縞目のあるものをアゲ

ート、縞目のないものをカルセドニーという。産出原石の形が葡萄あるいは腎臓のようで馬の脳に似ているところから「馬脳」と呼んだという。白、灰、淡青、緑、赤などの色のものがあり、それぞれ別名をもつ。エメラルドはラテン語 smaragdus(緑石)に由来し、和名「緑柱石」。緑といっても、黄、青、赤味をおびることがある。このラテン名はaśmagarbhaに転化しやすいのではないか。わたしの訳語は辞書に素直に従っただけなのだが。

「琥珀」コハク、「信解品」以下に見えるが対応する梵語がはっきりしない。中村元氏は「普門品」の例を挙げてmusāragalvaを当てているが、「車渠」の項にも『阿弥陀経』の例を挙げこの梵語を当てる。ところが『法華経』「授記品」ではその梵語に対する漢訳語は「玫瑰」なのだ。荻原『梵和大辞典』も「車渠・琥珀・馬脳・紺色宝」の訳語を並列するだけで、よくわからない。琥珀は三〇〇〇万年前の松柏類の樹脂の化石で、英語でアンバーといい、ソ連バルト海沿岸のビット鉱区産のものをビットアンバー、それが海に流出してさらに海岸にうちあげられたものをシーアンバーという。これは西洋人に知られたものだが、インドでも中国でも古くから産し、黄、褐、橙、赤、時に青色を帯びるものもあり、「紺色」に当てはまらぬわけではないが、一般的ではない。

「猫眼石」karketana, karketanaka(猫眼石・水晶・玫瑰)　猫眼石はクリソベリル(金緑石)の一種で、この石の中央をつらぬてい直角に白い光りの線条が現れ、石全体が猫の目のように見えるので英語でキャッツアイという。黄、緑、褐色のもの、その主調に他の色を帯びるものがあり、非常に高価な宝石である。よく似たものに虎目石があるがまったく別のものらしい。インド、スリランカ、タイなどが産地として知られる。「玫瑰」は、「方便」「授記」「見宝塔」に見え、「方便」「見宝塔」のはkarketanaと対応するが、「授記」のは対応せぬ。